

【講演会】

「かけがえのない私」を取り戻せ！

——格差社会・仏教・ダライラマ——

上 田 紀 行

未来に対して種をまく

上田です。どうぞよろしくお願ひします。ここで話で
きるのをすごく楽しみにして来ました。と言うのは、愛知
学院大学の先生を何人か存じ上げていますが、皆さん
素晴らしい先生です。どんな素晴らしい大学なのかと
思つて来たら、すごいキャンパスですよ、度肝を抜かれ
てしまいました。このスケールというのは、あり得ないぐ
らいのスケールです。ここの学生の方はこの大学しか知ら
ないのでこれが当然だと思つているけれど、例えば東京に
上智大学という大学がありますよね。素晴らしい大学で、
キャンパスの場所はいいのですが、四谷の猫の額のような

「かけがえのない私」を取り戻せ！（上田）

所にいくつかのビルが建っているだけです。明治大学の
キャンパスは、マンションのような十何階建てのビルがあ
るだけで、中はエスカレーターで上にあがって行つて講義
を受ける状況です。別に上智と明治を腐しているわけでは
ないのですけれども、愛知学院大学のこのサイズというの
は、本当に素晴らしいと思います。スケールの大きい人が
育つのではないかと思ひます。上智には上智の良さがあ
り、明治には明治の良さがあるわけですが、皆さんにはこ
の大きなキャンパスで是非大きな事を考えてほしいと思
ひます。

今日は八十分しか皆さんとの出会いがないのです。伝え
たいことがたくさんあるのだけれど、八十分で伝えられる

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

ことはすごく少ないです。僕も五十年間生きていて、伝えたいことはたくさんあるわけです。例えば、格差社会についても言いたいことがたくさんあります。

世界の中で、一日に四万人の子どもたちが貧困のために命を落としています。一日四万人ですよ。だから、経済的には日本に生きていて勝ち組なのです。この中には経営学部の学生諸君が多いと聞いたのですけれども、皆さんは経営学部で地球の経営ということを考えますか。会社の中でどこかの部署とか、〇〇株式会社の経営を考えるのが経営学部の本分ではなくて、日本全体をどのように経営していくのか、あるいはこの地球社会をどのように経営していくのかというのが本来の経営です。地球全体が死んでしまえば、株式会社〇〇とか、あるいは我が家の経営が幸せということはありませんよね。ただ、二十世紀というのはものすごい世紀でした。一九〇〇年に地球の人口は十六億人でしたが、二〇〇〇年には六十三億人になっていきます。二十世紀には、百年間で人口が十六億から六十三億まで増えたということから考えてみても、二十一世紀の地球はやっていけるのかということを、普通の理性がある人間

ならば考えますよね。この大きなキャンパスの中では、是非そのように大きなことを考えてもらいたいと思います。

また、仏教についても言いたいことがたくさんあります。私は、『がんばれ仏教！』という本や、『目覚めよ仏教！』という本を書きました。仏教に対しても、いろいろと言いたいことがあるのです。けれども、大学生の時には仏教などには全然関心がありませんでした。よく言われる言葉に、「愛の反対語は、憎しみではなくて無関心である」というのがあります。何かに対して憎しみをもっていたり、何かに対して「それは違う」ということを言う人は、そのものに対する関心があつて、そのものを愛している人だというわけです。「日本の政治はおかしい」と言っている人は、政治を愛しているから「おかしい」と言うわけでしょ。「そんなの、どうだっていいじゃん」というような無関心は、愛の最大限の反対語だという意味からすると、皆さんのような学生の時に、私は仏教に対して、「仏教なんて、あつてもなくてもいいじゃん」というくらいは無関心でした。「日本社会を仏教が支えている」とか、「仏教が二十一世紀にどのような役割があるのか」なんてこと

は、最初から期待しても無駄だという感じでした。しかし、あれから三十年くらいたって、愛知学院大学でこうやってお話をさせていただくわけですから、不思議なものです。

それから、ダライ・ラマについても言いたいことがたくさんあって、それだけでも九十分くらいは十分にお話できます。僕は一年半前にインドに行って、ダライ・ラマ十四世と二日間にわたって五時間対談させていただきました。

英語と英語で。こちらは無茶苦茶下手な英語でしたが、ガチンコでやらせていただきました。最初は一日一時間の対談で、それ以上はダライ・ラマの健康状態が許さないということでしたので、一日一時間を二回で、どのような対談ができるのかなと思っただけです。ところが、ダライ・ラマは、話がおもしろくなると時間が止まってしまうんです。あれだけ高い地位にあつて、あれだけ素晴らしい人が、話がおもしろくなると目が輝いてきて、子どものように「その話は面白いね。そこは、もうちょっと二人で考えてみようじゃないか」となって、二時間の予定の対談が五時間になつてしまいました。ダライ・ラマの頭の中には、最初か

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

らお説教の内容があるのではなく、その時その時で考えているわけです。こんな若造が日本からやって来て話をしていられるのかかわらず、「それはおもしろいね。日本の未来を、そして世界の未来を一緒に考えましょう」と言うんです。七十二歳にして、この目の輝き。新しいことを知ると、本当にうれしくなつて話が止まらない。議論が止まらない。その話の内容を、是非伝えたいと思うのです。

この講演が一年前なら「ダライ・ラマってだれ？」という感じだつたと思います。ダライ・ラマがノーベル平和賞をもらったのは知っているかもしれないけれども、それ以上のことは日本ではあまり知られていなかったのではと思います。しかし、今チベットが大変な状態になつています。チベットではこの五十年間で百二十万人が拷問や虐殺をされていて、今もまた騒動、騒動が起きています。そんな中でダライ・ラマの姿をテレビでご覧になつた方も多いと思うので、急にダライ・ラマという人が近づいたと思います。今日は、そのダライ・ラマの話もしたいと思えます。

いずれにしても八十分で伝えられることは少ないと思

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

ます。僕も大学生の時はそうだったのですが、こういう講演や講義を聴くと、この八十分で何を得たかということを考えますよね。良い講演だったか、悪い講演だったか。しかし、最初に皆さんにお話しておく、皆さんが二十年間生きてきた時間の中で、このたった八十分の価値とは何でしょう。それは一期一会です。それは未来に種をまくということだと思えます。

八十分で伝えられることはものすごく少ないです。ただ、私の話が面白いなと思ってもらえれば、そして、グライ・ラマのこともっと知りたいと思っただけならば、グライ・ラマの、好奇心に満ちた魂が躍動するような言葉がつまっている『目覚めよ仏教！——グライ・ラマとの対話——』という私の本を、講演の後に読むこともできません。あるいは禅に興味を持てば、この大学には禅の専門家の先生方がたくさんいるので、その方々にもっと教えてくれと言えばいい。経営について、地球経営について興味があれば、その関係の本を読んだり、いろいろな専門家に話を聞けばいい。あるいは今日のテーマの「かけがえない私を取り戻せ！」ということ、自分がかけがえない存在

だということをもっと追求したいと思えば、明日からの行動に変化が生まれます。この八十分間というのは、未来に対して種をまいているということ。自分はどういう未来を作っていくのか、どういう世界にしていけるのか。そういうことを考えてみる。今の僕たちの出会いはこの八十分間でしかありませんけれども、それが何らかの未来を生み出していくということが私は重要だと思えます。そして、そのことが、仏教でいう「縁起」、つまりすべてのものは因果関係の中にあるとか、関係性の中にあるとか、すべてのものは繋がっているということ。す

この八十分間の講演をいくらで買ったとか、評価はAだとかBだとかというだけでは何の繋がりもない、パッケージされたものの一つです。でも、それが私の過去と現在と未来を繋げていって、我々の中にある明日を、今日よりもより良いものにしたいなという意欲と繋がっていつて何かをもたらししていく。そのことが本当に重要だと思います。今日は言い足りないこともたくさんあると思いますけれども、ぜひ皆さんの未来に繋がっていけばいいなと思います。

かけがえのない人間と透明人間

まず、私の自己紹介としては、仏教の専門家というよりも、現在、日本で使われている「癒し」という言葉を最初に作った一人ということで知られています。

「癒し」という言葉は一九八〇年代の後半、つまり、ここにいらつしやる学部生の人たちが生まれた頃に日本でできた言葉です。もともと「癒す」という動詞はあったのですが、「癒し」という名詞はなかったのです。ところが、その頃に、「日本人はこんなに働いて、こんなに給料を貰って、こんなに豊かになつたけれど、本当にみんなは満足して生きているのか」とか、「満たされないまま、ただ働いて、ただ豊かさを求めているだけで、本当にそれでいいのか」とか、「どうやって生きていくのか、どうやって死んでいくのか」ということを言い出した人たちがいました。その人たちが、「これからの日本には癒しが必要だ」ということを言いました。それを最初に言った中の一人が僕だったのです。そんなわけで、「癒しの元祖」みたいに言われています。ですから、「仏教」とか「生きる意味」

「かけがえのない私」を取り戻せ！（上田）

を語るまで、私は「癒しの上田さん」だったのです。

さて、皆さん。自分のことを「かけがえがない」と思いませんか。僕は最近『かけがえのない人間』という本を講談社現代新書から出版しました。その前には岩波新書で『生きる意味』という本を出版しましたが、その中で一貫して書いているのは、日本社会で今一番問題なのは、一人ひとりが自分のことを本当に「かけがえのない存在なのだ」と思っていないんじゃないかなということ。例えば、一年間で三万人が自殺する時代。まだ去年の統計が出ていないのですが、去年の自殺者が三万人を突破していれば、十年間連続です。しかも、その裏側には二倍の数の自殺未遂者がいると言われていきます。つまり、この十年間で百万人が自殺を試みて三千万人が実際に亡くなったのです。さっきも、世界では一日四万人の子供たちが亡くなっていると言いました。でもこんなに恵まれた日本で、なぜ多くの人が自殺してしまうのでしょうか。

私の勤めている東京工業大学には留学生の人たちがたくさんいます。その留学生の人たちに、「この大学に来て一番のカルチャーショックは何ですか」と聞いたことがあります。

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

ます。そうしたら、アジアからの留学生たちは、「学生が授業中に寝ていることだ」と言うのです。確かにたくさん学生が寝ています。学生が寝ているのにシヨックを受けていては、大学の先生などやっていられません。でも、留学生の人たちに言わせれば、大学に来て学んでいられるのは相当恵まれているし、相当のエリートの人間なのです。

その人間は勉強することに命をかけているのです。例えばコックの修業をやっている人は、その修行中に寝ませんよね。刺身を切りながら寝ている板前ってアウトでしょ。大で命をかけて勉強して、勉強することで何かを成し遂げようとしている若者が、勉強する場である授業中に寝るということ。そんなプライドも誇りもない、どうしようもない集団の中に自分がいるのかと思うと、情けなくって何か言いたくなる。「こんな時に、なぜみんな寝ているんだよ」、「俺たちは勉強に命をかけている。たくさん学んで、いい世の中を作ろうと思って日本へ留学したのに、日本の素晴らしい大学に来たら学生たちは寝ている。お前たち、恥ずかしくないのか」と彼らは言います。

日本人の感覚から言うと、「寝てたって、周りに迷惑か

けてないじゃないですか」とか、「自分が寝てたって、自分が困るだけだよ」ということになります。ところが、彼らから見れば、日本の学生は自分に対する誇りが無いというのです。プライドがない。そして、私はプライドがない人間と一緒にいたくない。「お前たち、どうにかしろよ」と言っているわけです。こういうことも、かけがえのなさというに関係しているのですよね。本当に自分をかけがえないと考えていて、誇りを持ち、プライドを持ち、「自分はこういうことをやっているのだ」という人間は、そういう所では寝ないわけです。そういう視点もあるということを考えてみてください。

それに対して、僕が『生きる意味』や『かけがえない人間』の中で書いたのは、かけがえのなさを強制的に奪われている人がいるということです。例えば、一日に四万人の子供たちが貧困のために死んでいる。この子供たちは、本当にかけてがえのない存在だと思われていない。貧困が原因で死んでいる、あるいは貧困のために生きていけないという人は、かけがえのなさを奪われている。だから、そういう意味では格差を是正していかなければ、この世の中で

かけがえのなきを取り戻すことはできない。

一方、この日本の中で、こんなに恵まれているにもかかわらず、多くの人が自分をかけがえがない存在だと思えない理由は何なのか。それは、日本人全員が「交換可能」になっているからなのです。皆さんは、「俺なんて、すぐに他の人と交換されちゃうよ」と思っていますか。「別に俺じゃなくてもいいんだ」という意識が、今の日本人にとっての災難なのです。

昔、酒鬼薔薇君という少年が神戸で何人も人を殺しましたね。あの少年が自分は透明な存在だと言いました。透明な存在だけど、實在だと認めてほしい。そこで、多くの教育学者は、子供たちのことをもつと見てやらなければいけない。誰にも見てもらえないから、この子どもたちは透明人間だと言っているのだと言いました。けれども、それは半分正しくて、半分間違っていると僕は思いました。僕たちは、確かに誰かに見てほしいけれど、よくよく考えてみると、見られれば見られるほど透明人間になってしまう自分たちがいるわけです。ここにいらっしやる皆さんはどうですか。

「かけがえのない私」を取り戻せ！（上田）

若い人たちと話していると、みんなよくこんなことを言います。「絶対、自分を出したらいけないんだ」、「自分の本音を言ったらいじめられる」、あるいは、「本音を言ったら、『おまえ、そんなのクサすぎるよ』と言われてしまう」。先生たちからも「今はお前の色を出すところではないだろう」と言われるし、親からも「そんなことを言っている前に勉強しなさい」と言われる。でも、一番怖いのは、友達から「お前、空気読めよ。自分の意見なんか言わないで、周りにあわせるよ」と言われることです。

日本人は人前で、なるべく自分を出さないようにしているのです。ところが、人間のかけがえのなさとか、魅力とか、「俺は俺なんだ」という意識は、自分の色とか匂いから出てくるものです。人間は誰でも自分の色があり、誰でも自分の匂いがあります。こうやって話している僕には相当な色があり、相当な匂いがあります。ですから、こまで聞いただけで、「この人の色はいい」と思う人もいれば、「耐えられないな、誰がこいつを呼んだんだよ」と思っている人もいます。

「すべての人に愛されよう」などということは、人間と

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

しては無理なのです。俺が嫌いなら、あなたはあなたの色で頑張つて。もしも好きなら、俺と一緒に何かをやるよ。それでいいではないですか。愛されていることの反対は無関心ということだから、「お前のことなんか嫌いだ」とか、「お前とは違う生き方がしたいんだ」と言ってくれ人は、実は俺のことを愛してくれているのだと私は思っています。自分の色がある、自分の匂いがあるということが、かけがえないこと、あるいは、自分の人生を生きているということだと思いませんか。

しかし、今の日本社会では、友達の中でも、あるいは企業に入っても、「自分の色なんか出したらだめだよ」とか、「自分の匂いを出すやつはクサすぎるよ。それを取れよ」と言われて、自分の色や匂いを脱色したり、脱臭したりしていきます。そして、脱毛とかもしちゃいます。そうすると、そこには本当にのど越しのいいお酒のような人たちができてきて、するすると抵抗感がなくなります。けれども、その人たちの会話は、あまり深いものにはなりません。「今日の何限が休講だ。ラッキー」とか、「今日は食堂で何食べるの」とか、「単位はこれでオーケー。楽勝だ」

みたいな話ばかりで、本当に色のついた話とか、匂いのある話ほしくない。だから、飲み会などに行っても盛り上がりがない。自分で脱色脱臭していくと、酒鬼薔薇君のような透명한存在になるわけです。

透明な存在は他の人から嫌われません。だって、その人はいつも周りに合わせてくれるから。だけど、皆さんがコンパなどに行つた時、後になって、「こいつは来ていたな」とすぐに思い出せるやつと、写真を見ないと、「あいつが来ていた」ということを思い出せない人がいますよね。透明な存在になってしまえば、他の人から嫌われることはなくなります。だけど、交換可能な存在になつてしまふ。同じ透明人間なら、すぐに交換されてしまうのです。

日本の教育は、こういう透明人間を育てるという意味で機能してきました。本当に個性的な人を育てるのではなくて、どこの課に配置転換されてもすぐに空気を読んで、そこで適当なところまで仕事ができる人を育てていくという教育です。それでもうまくやってこれたのは、経済成長があったからです。一九九〇年くらいまでの四十年間、日本を支えていた宗教は、仏教でも神道でもありません。経済

発展教という宗教だったのです。これをやっていたら、絶対明日が豊かになる。かけがえがなからうが、他の人と交換可能だろうが、みんなが同じ既製服を着て、みんなが同じことをやっていけば、みんなが一緒に豊かになっていくだろうという世の中だったわけです。それはそれで良かったと思います。だって、誰でも貧乏にはなりたくはないのです。だけど、その考え方の賞味期限が切れて、経済成長が横ばいになったにもかかわらず、「お前は自分自身を脱色して、透明な存在になれ」という部分だけを残しているわけです。けれども、「このまま周りの空気を読みながらやっていて、一体どうなるのだ」ということをみんなが思い始めました。これだけ豊かになったにもかかわらず、何かすごく抑圧的なものを感じながら生きている人が多いのです。

かけがえのなさに気づく時

では、そのような中で、どうやって自分のかけがえのなさを取り戻していくのか。例えば、アーティストとしてもすごい才能があれば、かけがえがないと思えたりするか

「かけがえのない私」を取り戻せ！（上田）

もしれせんね。バイオリンの天才少女なんて言われたり、あるいは、バンドをやっていて全国ツアーができたりとすると、それはそれでかけがえがないと思います。ただ、今の政府が誘導しているのはこんな感じだと思えます。「お前は、六本木ヒルズの上に住むようになったら、かけがえがないと思えるだろう」という感じですよ。

でも、本当に六本木ヒルズの上に住めるようになったら、かけがえのない人間でしょうか。僕は、それはちょっと違うなと思うのです。どんなに年取が高くなっても、ビル・ゲイツには負けますよ。世界のどこかに、自分と同じくらいの年取の人はいるわけです。だから、やはりどこかで交換可能な存在になってしまいます。そうではなくて、もうちょっと違った形で、自分のかけがえのなさを取り戻す方法があるのではないのかな。そんなところから、僕は仏教に非常に着目しているのです。

『生きる意味』の中で、私たちがかけがえのなさに気づくのは、「自分は何をする時にワクワクするか」と考える時と、「自分の苦しみの中から、かけがえのなさを取り戻すことができるのではないか」と考える時の二つがあると

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

書きました。

自分の趣味があつて、ものすごくワクワクできることのある人は、すごくかけがえないですよ。いろいろな所でそういう人に出会います。例えば、『釣りバカ日誌』という映画の中で、西田敏行さんが演じている浜ちゃんという人は、会社に入っても釣りさえやっていれば幸せなのです。そういう人間は相当幸せです。左遷されようが、リストラされようが、釣りだけやっていれば楽しいという人間はすごく強いです。

僕はスリランカに行った時に、そこで七十歳の日本人のおじいさんに会ったことがあります。その人は六十歳くらいで定年を迎えて家にいるようになったら、奥さんからうつつうしがられて、「あなた、毎日家にばかりいて、どこか行くところがないの？」と言われて困ったそうです。そんな時にシルバー・ボランテアという制度を知って、スリランカで植林をする人を求めていることを知ったのです。そこで、スリランカに行ってみたら、本当に山が丸坊主になつていて、ここで植林ができるのではないかと考えました。間もなく、このおじいさんが植林しているのを見て、

現地の若者たちが集まってきた。「おじいさん、何やつているんだ」と聞くので、「植林をして、この山を緑にしたんだ」と言うと、「じゃあ、俺たちも手伝うよ」ということになった。だけど、あまり種や苗を持っていなかったもので、すぐに終わってしまったのです。そこで、日本に帰ってきて、「私はこれからスリランカで植林をやります」と言いながら、いろいろな人から募金を集め、そのお金で何十万もの苗を買って持っていった。そうしたら、現地の若者たちが、「おじいさん、よく来てくれたな」と言つて、また植林をしました。その後、また日本に帰ってきて、講演会などで「こういうふうになつていよう」ということを話しながら、みんなに写真やスライドで山の緑を見せてお金を集めていった。当時、僕は大学院生だから三十歳くらいだったんだけど、その七十歳くらいのおじいさんは、「私は八十歳まで生きると思っています。そこから先の予定はたつていないけれども、どこまで、この山が緑になるかと思うと、この十年間がとてもワクワクするんですよ」と言っていたのです。すごく若々しかったですね。生き方に迷っていた当時の僕なんかよりも、そのおじ

いさんの方がずっと若いんじゃないかとびつくりしました。ワクワクは六十歳からでも始まります。そしてワクワクしている人は本当に強いのです。

私たちがかけがえのなさに気がつくもう一つが、苦しみです。私たちの社会は、苦しみというものをすごく嫌います。あるいは、暗いことを嫌います。だけど、人生では苦しいこととか、暗いことというのが本当は重要なのではないか。仏教では、この世は苦しみから始まるという。お釈迦様の最初の説法は「苦集滅道」という「四聖諦」という教えでした。生きるのは苦しみである(苦)。でも、そのことには原因がある(集)。その原因がなくなつたらどうなるか(滅)。そうすれば幸せになる。そのためには何をやるか(道)。苦しみという現実と、その原因を見つめ、それがなくなるということをイメージしながら行動に移していけば、人間は苦しみから解放されるのではないかという教えです。苦しみから始まるというのは、一見するとすごく暗い教えです。だけど、仏教はその逆説がすごいと思うのです。

「かけがえのない私」を取り戻せ！(上田)

苦しみからの出発

今日、私なぜ皆さんとこうやって会っているかという、実は苦しんでいたからなのです。私は、六本木ヒルズじゃないけれど、六本木の近くの乃木坂という所で生まれました。乃木坂というのは六本木と赤坂の間にあります。地価がものすごく高い場所です、その数百坪の土地持ちの息子として生まれたのです。今、乃木坂に数百坪の土地があつたら、数十億円か数百億円はすると思うから、ここで講演もしていません。今頃、六本木ヒルズに住んでいたかもしれないでしょう。今頃、六本木ヒルズに住んでいたかもしれない。だけど、その土地を全部、私の父親が叩き売っちゃつたのです。

私の父親は作家を目指していたのですが、とんでもない遊び人でした。私の母は俳優座という所で演出の仕事をやっていました。愛川欽也という俳優がいますけれども、その人と同期です。小説家になろうという若者と、演出家を志していた人が結婚して、なおかつ、その小説家を志していた若者は乃木坂に数百坪の土地がある家の長男だった。そんな、とてつもなくバブリーな家に私は生まれたわ

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

けです。だけど、私の父親は、小説を書くためには女遊びと博打とお酒をやらなきゃいけないと言って、家の金庫からお金を持ち出して、それを実践していたわけです。さらに、何をとち狂ったか、おじいさんに内緒で土地を売ってしまったのです。それが発覚して勘当されて、その後は財産分与で手に入れた田舎の畑の中に建つ建売住宅に移りました。「僕はこれから頑張つて芥川賞をとる。これから頑張るぞ」と掛け声だけは良く、書棚も作りつけのものを作つて、ここで小説を書くんだと宣言しました。ところが、その引越しの日に、手伝つてくれた文学仲間に寿司でも食わせてやるからと言って、出かけたまま失踪してしまつたのです。お金を全部持つて、私の父はいなくなつちやつたわけです。家にはお金が無く、米櫃の米もだんだん少なくなる。でも、父は帰つてこない。結局、私の父と母は離婚をしました。

その後、母は演劇などしていらなくなって勤めに出ました。私は、父親が三歳の時に去っていますからママツ子になりました。母親に再婚の話があつても、可愛い五、六歳の僕は、「僕が大きくなつたらママを何回も世界一周旅

行に連れていくから、僕と一緒に生きていこうよ」などと言ひ、母親も「再婚なんかしないで、可愛いこの子とやっていこう」と思っていました。だけど、私は思春期あたりで爆発して発狂しそうになりました。と言うのは、私の母親はすごい原動力で世の中を生きていく人だつたけれども、その張り切りの根源には「男への怒り」というものがあつたのです。「日本の政治は、すべて、男の政治家が悪くしている」とか、「男はどうしようもなくだからがない」とか、「男は女に対して汚いし、どこかで女を作つて何かをしようと考えている」といった具合です。そして、その最大の根源は、私の父親のことをよからぬ者だと思つていることにあるわけです。男への憎しみですね。

ところが、私が思春期ぐらいになると、私の顔と失踪した父親の顔がそっくりになってくるのです。可愛い僕がだんだん男になってきて、その男が、女を作つて遊びまくつた父親の顔にそっくりになってくるわけです。母親も、これは相当やばいと思いますよね。この子を、あんな男と同じように育ててしまつたら、教育は大失敗だということになる。だから、すごく厳しくなつてきました。例えば、私

がテレビでエッチなドラマを見てると、後ろで母親がピリピリしているし、「女の子とエッチを一回してしまおうな呪いの言葉を投げかけられたりしたわけです。だから、私は母親の機嫌をものすごく気にする子供になってしまいました。「今日は母親がガチャガチャと大きな音をたてて食器を洗っているから、僕に腹を立てているんだ。この後、雷が落ちるんじゃないかな」と、四畳半でひたすら母親の機嫌を気にしながらじっとしているのです。また、そんな自分がとても情けないのです。

その上、母親から言われました。「あなたの中には半分邪悪な血が流れている。その邪悪な血を目覚めさせたら駄目だ」と。確かに、邪悪かどうかはともかくとして、私の中には父親の血が半分流れているわけです。だから、母親としたらすごい愛情で言っているわけですよ。しかし、私の中に父親の血が流れていることは事実なので、それは逃れられないことです。そうやって私の心はどんどん悪循環に陥ってきて、本当にわけがわからなくなり、私は高校生に母親に言い放ちました。「あんたと別れるためな

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

ら、外で人の一人や二人ぶつ殺す、刺し殺す」と言いました。親不孝ですよ。本当に申し訳ない。家が貧乏だったから、母親がものすごく働いて、やっと僕をここまで育ててくれた。それなのに、その母親に対して、そんなことを言うわけです。申し訳ないと思うのだけれども、でも、そのくらい感じでした。このおぼさんと狭い2DKのマンションで一緒にいると、俺はもう死んじゃうという感じだったので。

それでも、私は大学に入ってから家に居続けました。「お前のせいでこうなった」と言いながら、家を出て行かないのです。本当なら、そこで自分が家を出て行って、新聞配達のアルバイトでもしながら、「あなたとは、ハイ、さようなら。私は自活します」というふうに言えばいいのだけれど、相変わらず親のすねをかじって、お小遣いを貰って、食費も入れずに飯食いながら、「お前のせいで俺はこうなってしまった」と言い続けたわけです。

これには私の母親も相当参ってしまいました。私が二十歳くらいのときに、「じゃあ、家族を解散しましょう」ということになったのです。それで、何が起こったかとい

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

うと、「あんたに出て行く気がないのなら、私の方がこの家を出て行くから、あとは勝手にしなさい。私は昔から住みたい場所があったから、そこに移住します」と言って、母親はアメリカ、ニューヨークのマンハッタンに移住してしまいました。翻訳をして、ミステリーなどを訳していたので、ニューヨークに一度住みたかったらしいのです。

「これからは、私のことをマンハッタン・ママと呼びなさい」とか、わけのわからないことを言って、アメリカに移住してしまいました。友達からはよく「素敵な母親」だと言われます。だけど、子どもからすると、「これが友達のお母さんだったら良かったのにな」と思うわけです。友達の母親だったら「素敵なお母さんね」で済むけれど、それが自分の母親だとすると、暑苦しさぎると言うか、エネルギーがありすぎて、こっちがおかしくなってしまう。

虚しさからの復活

その母親がニューヨークに行ってしまったから、私は本当に発狂してしまいました。と言うのは、いろいろなことを誰のせいにすることもできないし、母親の呪いが解けた

から自由に何でもやりなさいと言われても、何もやることが考えつかないわけです。大学に入ったけれど、何をしようのかわからない。一応、勉強はできるのだけど、頭の中が受験教育化しているような学生でした。点数を取るところに、自分の勉強が固定されているわけです。

例えば、中学や高校で期末の試験があるじゃないですか。そうすると、一時間目が地理、二時間目が古文ということがありますよね。地理が終わった後の十分間の休み時間に、周りのやつらは答え合わせをしています。「世界一長い川はどこだよ」、「ナイル川」、「ミシシッピー川」、「ありゃー、オレ信濃川って書きゃったよ」と、バカなことを言っているわけです。そういうのを聞いてみると、「こいつら、本当にバカだな」と思っていました。何がバカかというのと、答え合わせをしていること。なぜなら、今さらナイル川だろうがミシシッピー川だろうが、信濃川だろうが、点数は変わらないわけですよ。十分間の休み時間は答え合わせをするんじゃないでして、次の古文の暗記ですよ。「ましかばまし」とか、「連体形」だとか、源氏物語のあらすじとか。そういうのをアンチヨコを見ながら覚えて、次

の古文の点数を上げることが重要なんです。そういう勉強、つまりコスト・パフォーマンスをいかによくするか、最小限の努力でいかに最大の点数を取って評価を上げるかということ、私は中学や高校でやり続けてきたわけです。

そして大学に入ります。当然、自分が何をやっていいのかわからない。「楽勝科目リスト」のコピーが回ってきて、最小の努力で「A」とか「優」がたくさん取れる科目を自動的に選んでいく。学期末には誰かのノートをコピーして、何もわかっていないのに暗記だけやって点数を揃えていく。だけど、それが相当虚しくなってきました。

あともう一つ。大学に入ったら、本当に何かを愛しているやつに出会うわけです。ナイル川の源流にどういう人が生きていて、どういう文明が育ってきたのかということを考えるだけでワクワクして、ピラミッドの絵を見ながらニクニクしているやつがいるわけです。あるいは、源氏物語を暗記の対象としてではなくて、源氏物語の紫式部がどうだとかいうことを、ワクワクしながら語っている人がいる

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

わけです。そうなってくると、古文であろうが地理であろうが、すべてが点数を取る道具でしかない私にとっては、本当に自分が愛しているもの、それをやって本当にワクワクするものがないのです。大学にはこんなにたくさん科目があるのに、そのすべてが点数を取るための科目になっってしまったら、本当に自分が何を愛して、何をやりたいのか見つからないという状況になりました。

それに、私は六年間男子校だったので、大学に入っても、すぐくまじめで、コンパに行つて隣に女の子が座つても、「福田政権の今後はどうでしょうかね」みたいなことしか言えないやつでした。だから、全然もてなかつたです。当時のことはあまり思い出したくないですね。そして、ノイローゼになつてしまいました。最後には、どうしようもなくなつて大学に行けなくなり、大学のカウンセリングに行きました。カウンセリングの扉を叩いた時、最初の一言目に、「僕は、顔はこんなにニコニコしているんだけれど、心は全然違うのです」と言いました。顔はすごくニコニコしている。皆の話を聞いて「頑張れよ」と言うけれど、誰も僕の肩を叩いて「頑張れよ」と言ってくれる人

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

はいない。自分自身で何かをやるうとしても、本当に魂の底からそれをやりたいと思っただけで自分が動いているのではなく、「この場では、こういうふうにするのが一番ポイントが稼げる方法だ」というように、自分の体と心が勝手に反応してしまっている。もう、ロボットみたいになっっているのです。「最小の努力で、最大限みんなから評価を得るのはこういうことだ」というふうに、叩き込まれていることをやり続けているわけです。だから、それは自分の人生ではなくて、そういうシステムとかアプリケーションを載せられたロボットにすぎないということが、だんだんわかっただけです。でも、そのロボットの状態から解放されるには、どうしたらいいのかわからなかったのです。

僕の友達に、太宰府天満宮の宮司という人がいます。菅原道真の血が流れているのですが、そいつもノイローゼになってしまいました。彼は一年間留年して、浜松の本田技研の工場で組立工をやって、金を貯めてからインドに行きました。その後、数ヶ月間インドに行っていて、帰ってきたら全然違う人になっているのです。オーラが出る人になっていて、みんなに向かって「世界は絶対に面白

い。インドに行けば、お前も絶対に元気になるから行ってこい」と言うんです。彼にそのかされて、私の学年の三十人くらいがインドに行きました。それだけパワーのあるやつだったので。ちなみに、彼の名前は中野民夫君といいます。今、彼は博報堂に勤めていて、「愛・地球博」の時には「地球市民村」のジェネラル・プロデューサーをやりました。岩波新書から『ワークシヨップ』という素晴らしい本を出版しています。

その彼にそのかされて、私はインドに行つたのです。インドに行って空港を出たとたんに、乞食の子供たちがワーツとやって来て、私は彼らにつかまえられました。彼らを見ると、「お前を絶対に逃がさない」という目をしているのです。こんな目があるのかと、私はびっくりしました。日本ではそういう目を見たことなかったのです。つまり、僕がインドですごく実感したことは、人間には存在感のレベルがあるんだということです。何ができるとか、点数がどうのとか、そんなことはどうでもいい。人間には存在感があるんだということが、すごく感じられました。

インド旅行はすごく大変です。この辺でおっさんが寝て

いるなと思つたら、死んでいる。死んでいる人の存在感。焼き場でチリチリと焼かれている人間の存在感。僕はノイローゼ気味で、ちよつと小金を持つている日本人の学生ですから、悪人がたくさん集まつて来るのです。まず、商人が来る。どこかに遊びに行こうよと誘ひに来る。あるいは、当時の僕はヒッピーのように長髪だったので、じいさんが「その髪は綺麗だから売ってくれ」というような、わけのわからないことを言ってくる。そういう、「何だ、こいつは」というような人々をかき分けて行かなければいけない。買い物をするにしても、値段を値切らないといけない。定価の三倍から十倍くらいの金額を、インドではタクシー運転手をはじめ、すべての商店の人が言ってきます。それを値切るにはどうすればいいのか。

当時の僕からすれば、言葉の意味が通じればいいのだからと頭で考えて、「Please discount」と言ってみたり、もっと丁寧にするには「Will you」をつければいいのか、「Will」を過去形にして「Would you please」と言えばもっといいとか考えるわけです。だけど、タクシーの運転手に向かつて「Would you please discount for me?」な

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

んて言えば、文法的にはパーフェクトですけど、「どうかもっとお安くしていただけませんかしら？」みたいな感じですから実際には最悪なわけです。インドで「Would you please discount for me?」と言えば、「俺はカモだ」と言っているようなものです。値段はどんだん上がっていきまます。それでは駄目だから、どうすればいいかというと、頭で考えるのではなく、いかに自分が全身全霊で値切るかということをやります。「つま先から頭の先まで一ルピーにしたいと願っている。本当にそうしたいんだ。ここで負けたら俺の人生は終わりだ」くらいに思つて、全身全霊が一ルピーになったところで、「一ルピーにしるよ!!!」と絶叫することが重要です。これが日本語でも値切りは成功します。値段がガンと下がるのです。

その時、もう一つ面白いことがあります。「Would you please」とやっている時は全世界が敵だらけなのです。「俺は敵の中にいるな」と思いました。だけど、「お前、それは嘘だろ」、「そんな値段のわけがないじゃないか」と絶叫すると、向こうはハツとして、「お前はインドを相当旅行してきているな」、「お前と俺はつわもの同士の友達だ」

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

となるのです。こちらを敵だと思つてバカにしていたやつが、急に仲間になる。自分の言いたいことをガンと言えば、向こうもガンと来る。一見、こいつは敵だなと思つていた相手が、敵ではなくなるといふことなのです。

そんなふうには全身全霊で何かを求めることがわかつてきたら、なぜか人生が元気になつてきたのです。ただ、インド旅行の後でもいろいろと落ち込んだり悩んだり、ジェットコースターみたいな人生でしたが。

縁起の教え

そんなこんなで、いろいろと情けないことをたくさんやつてきたわけなんですけれども、それがなければ今の私はいないわけです。考えてみると、私の父親は、三歳の子供と妻を置いて、家の金を全部持ち逃げして失踪したでしょうもない父親でしょ。けれども、そのどうしようもない父親がいればこそ、私はその後でノイローゼになり、その中から「癒し」という言葉をたぐり出し、その結果、交換不可能な私としてここでお話ができています。どうしようもない父親がいなければ、こうやって皆さんとも会つてい

ないわけです。あるいは、母親に対して親不幸にも、「お前と別れるためなら人をぶつ殺す」と言うくらいに追い詰められたり、ノイローゼになつて本当に自殺しようとした。そういうのがなければ、ここでの縁というものは結ばれていないわけです。だから、わからないものですね。

仏教に「縁起」という言葉があります。人生には苦しみというものがあつて、そのことが逆に、あなたのオリジナリティーにつながっていく。「苦集滅道」を通ることによつて、人間はかけがえのなさを得ていくのだという大きな教えです。

例えば、どんな成功する人がいますね。だけど、『かけがえのない人間』でも書いたのですが、人間が成功するというのは、結構オートマチックなものです。この偏差値があれば、この大学に入れる。自分の偏差値の中で一番いい大学に行く。この条件の中で一番いい企業はここだから、この企業に入った。一見、成功しているでしょ。一番ベストな選択をしている。だけど、誰にでも聞こえのいい大学、聞こえのいい企業に入るといふことは、日本人なら

誰でもそうするから、交換可能な選択なのです。わかりますか。それを、僕は本の中で「オートマチックな選択」と呼んでいます。これが一番聞こえがいい、見栄えがいいからそれを選択する。他の人からすると、「あなたは成功しているね」と見えるけど、それはオートマチック、自動的な選択です。だから、あなたでなくても、誰かが同じ選択をしたでしょう。「私でなくてもこの道を行ったのだろうな」というような成功体験を積み重ねると、一見成功しているように見えて、やればやるほど俺は他の人と交換可能なのだという方に導かれていきます。成功には罫があるのです。

そんな中で、「ちよつと、お前、目を覚ませ」、「お前の人生をよく考えてみるよ」ということで、いろいろな苦勞が襲ってくる。『かけがえのない人間』の第四章に、「我々がかけがえのないものに出会えるように、神様は日夜穴を掘ってくれているのです」と書きました。「一見ネガティブに見える挫折や苦しみは、神様があなたのために掘ってくれた穴ぼこです。その穴に落ちることで、自分が見える、人生が見える。その中でもがきながら、私たちは人生

「かけがえのない私」を取り戻せ！（上田）

の宝に出会うのです」と。成功している時には、たくさんの人たちが自分に近寄ってきます。けれども、自分がお金を失ったり、地位を失ったりした時に去ってしまう人もたくさんいます。そんな人は、私に近寄ってきたのではなくて、私のお金とか地位とか、私の影響力に対して近寄ってきたのだということが、その時にわかります。そういう穴ぼこに落ちた時に、「お前、インドに行ってみるよ」とか、「どうしよう」と言って一緒にいてくれる人は本当に大切です。その時に一生の友に出会ったりするのでね。

仏教の言う「縁起」とは、まさにそういうことなのです。私の父親がいなければ、今ここに私は立っていない。私の母親がいなければ、私はいない。つまり、縁起とはどういう思想かと言えば、過去との因果関係、さまざまな関係の網の目を離れて、この私が単独で存在することはあり得ないということ。それは時間軸の前後関係の中で、関係性の「輪」というものがあるということです。

それと、もう一つ。私がここにおいて、こういう話をしてるのは皆さんが聞いてくれているからです。縁起というのは、時間軸の中の因果関係であるとともに、私と皆さん

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

のように、時を同じくするもの同士の関係でもありません。私は自信満々に話しているように見えるかもしれませんが、しかし、こうやって聴衆の皆さんが真剣な眼差しを送ってくれていることが、私に力を与えてくれて、私をして、ここでこうやって話をさせてくれていたのです。縁起のことを「空」、つまり、「空即是色」の「空」とも言うのですけれど、縁起にはそういう意味もあるわけですね。

ダライ・ラマのメッセージ

そういった過去があつて、僕はダライ・ラマに会いました。なぜダライ・ラマに会えたかといえば、僕がそういう内容の学問をしているからではなくて、今お話したような生い立ちの中で、人間はどうやったら幸せになるのだろうかとか、どうやったら世の中はより良くなるのだろうかと考えてきたからです。あの父親がいなければ、あの母親がいなければ、ダライ・ラマには会っていません。

ダライ・ラマが最初におっしゃったことは、「人間社会にはたくさんの暴力やいろいろなことがあるけれども、人間社会を根底から支えているのは愛と思ひやりなのです

よ」ということでした。新聞を見れば、本当にあり得ないような殺人事件とか、一日に四万人の赤ちゃんが亡くなっているとか、戦争がなくなるとか、そういうニュースばかりが書いてあります。だけど、新聞の中で、誰かが死にそうなる人を助けましたとか、孝行息子が親父を看病していますというのがニュースになったら、人間はおしまいです。殺人事件がニュースになっているとか、戦争が起ったことがニュースになっていることは、我々がまだ、どれだけ愛と思ひやりをもって生活しているかということを表しています。そうしたことが、まだ崩れていないという方を見なくてはいいけない。ニュースにならない方を見なくてはいいけないのです。どんな悪人であろうが、殺人者であろうが、彼らには家族がいて、家族から愛されたいと思つている。みんな、心の中では本当に愛と思ひやりを求めている。そのことをまず考えてください。

これは、ダライ・ラマが言うからいいのであつて、口先だけで言う人は、「バカ、偽善者」と言われて終わってしまいます。しかし、ダライ・ラマがそのことを言うのは大きい。百二十万人の自分の同胞が殺されて、それでもな

お、中国に対して愛と思いやりの態度で接していくというのが本當の愛と思いやりなのです。

そしてもう一つ。「愛と思いやりを持ってばこそ、まちがったことに対しては怒るんです」とおっしゃった。皆さん、仏教というのは「何が起こつてもニコニコ暮らせ」ということだと思つていませんか。日本のお坊さんの中に、「そんなことで怒っているのは、まだまだ修行が足りない証拠だ」と言う方がいます。それは当たっている部分もあります。小さなことにいちいち怒っている人は修行が足りません。「この人からこれを言われた、あれを言われた。こいつのせいでこうなった」と毎日キレている人がいるでしょう。その怒りというのはよろしくない。しかし、大きな差別や暴力に対しても、「何が起こつてもニコニコ暮らせ」はぜったい仏教でも何でもありません。ここにかけがえのない人がいて、このかけがえのなさが奪われている。誰もがかけがえのない人生を歩む権利があるのに、何らかの理由で、その人がかけがえのないものとして扱われていない。そのことに対しては、仏教徒は本當に我がことのように怒らなければいけないのです。

「かけがえのない私」を取り戻せ！（上田）

仏教には二つの柱があります。「知恵」と「慈悲」です。「知恵」は学ぶこと。「慈悲」は、苦しんでいる人を何としてでも救いたいという決意を持つて救うこと。日本の仏教は大乗仏教ですけれども、大乗仏教には菩薩という教えがありますよね。菩薩というのは、困っている人がいたら、何としてでも救いたいという誓いを立てた人のことです。それがお坊さんであり、そして我々仏教徒です。そういう教えを根底に持つているわけです。

ここで、かけがえのない人間ということを考えて、僕たちは、「自分がかけがえのない人間になればいいな」と考えますね。ところが、そこがトリックなのです。「僕だけがかけがえのない人間になればいいな」と思つていて、自分の目の前にかけてがえのなさから遠ざかったまま死にそうになっている人がいても、「僕には関係ない」となつてしまふ。でも、そんな人を本當にかけがえのない人間と言えるでしょうか。他の人の苦しみをちゃんと自ら引き受けて、そのことに対しては本當に怒るといふこと。そのことが重要です。

ただ、それは人に対して怒ることではないとダライ・ラ

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

マはおつしやいます。怒りは人に対してではなく、その行為に向けられるべきであり、その行為の原因、つまり「縁起」の探究へと向かうべきだということです。その苦しみの原因は、どこから生じているのか。例えばテロリストが人を殺すと、みんなは「このテロリストを殺せ」と言いまです。でも、それは原因の探究が間違っている。誰がその拳銃をテロリストに与えたのか。アメリカを攻撃しているテロリストたちも、アメリカの銃を使っていたりするわけです。なぜ銃を野放しにしていたのか。あるいは、そのテロリストは貧しい村の出身だけど、もしも彼が豊かなところに生まれていたら、テロリストになっていただろうか。もしも、僕自身が本当に貧しい村に生まれて教育も受けられないのに、テレビなどを見ると世界にはすごく豊かな人がいて、その豊かな人たちは格差を縮めようという努力を全然していないように見えた時、誰かから「お前が貧しいのはあいつらのせいだ。だから、あいつらを殺せ」と言われれば、僕だってテロリストになっていたかもしれない。テロリストというのは他人事ではないのです。私もそういう村に生まれ育ち、「世界を変えるためには、あいつを殺

せ」というように言い含められれば、若い僕は同じことをやっただと思います。何せ、自分の母親から離れるためには、一人や二人くらい殺してやると言った人間ですから。そういう意味で、仏教というのは「テロリストを殺せ」と言うのではなくて、「私も、もしかしたらテロリストになつていたかもしれない。では、私もそうなつていたかもしれない本当の原因は何なのか」と、そのことに向かつて怒りを向けるものだとおつしやいました。

また、私はダライ・ラマに、「チベットでは百二十万人が虐殺されて、今も人々が自由のない状態で暮らしているのに、あなたはなぜ、いつもそんなにニコニコと楽しそうなのですか」と聞きました。ダライ・ラマはこう答えました。「それも縁起なのです。中国に攻められる前のチベットは、外の世界のことを全く研究していなくて、内側ばかりに目が向いていた。その時のチベットの仏教は、社会性がなく、外の世界に開かれていなかった。そういう原因があったから、チベットは中国に攻められ、その時、各国に「助けてくれ」と言っただけでも誰も助けてくれなかった。その後、私はインドに亡命して、たくさん勉強して、

今は全世界が平和になるために、豊かになるために活動しています。私が生きている間に世界に平和が実現されるかどうかはともかくとして、今、私は未来に向かつていい種をまいているという実感があるのです。日々いい種をまいていけば、必ずそれは裏切られることなく、未来のどこかで芽を出して、花を咲かせることができます。私は微力ですから、私一人の力で世界がどうなるのかはわからない。しかしながら、一人の人間として、日々良い未来のために種をまき続けているという自覚があれば、どんな絶望の中でも私は毎日を輝かせて生きていくことができるのです。」こんなふうにおっしゃいました。

ダライ・ラマの教えを受けたクンチョク・シタルという仏教学者が日本にいらつしゃいますけれども、その方が同じようなことを言っています。「チベットでは、人々が政治的に弾圧されても暴動はあまり起きない。ところが、お坊さんが叩かれたとか、お寺が破壊されたという時には必ず暴動が起こります。だけど、それは仏教が破壊されたから、ということではない。チベットの仏教は利他の教えです。自分の慈悲の心を他の人に伝えることに、自分たちの

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

アイデンティティがあるのです。だから、自分自身が将来に向けて種をまけない人間になってしまったら、今生きている甲斐がないのです。苦しんでいる人の手助けをする可憐性が奪われて、私自身が慈悲のない人間になってしまつたら、今生きている意味がなくなつてしまうのです。ですから、私が叩かれたことに対して怒るのではない。未来に向かつて何かをすることができない、あるいは、困っている人に対して何かをできないということが、私のかけがえのなさを奪つてしまう。だから、そのことに対する息苦しさに耐えられないのです。」こういうふうにおっしゃっています。

そのことを聞いて、僕は愕然としました。日本の仏教は、私たちの後ろ側のご先祖様を強調して、今の私はそのご先祖様のおかげであり、ご先祖様に感謝しなさいと言いますね。それは素晴らしい考え方だとは思いますが、とすれば「ご先祖様のご恩に感謝して、何があっても我慢して生きますですよ」という言い方が定例化しています。何があっても我慢しろ、自分の意見は言うな、みたいに聞かえるところがあります。つまり、日本の仏教には後ろ側の

「かけがえない私」を取り戻せ！（上田）

縁起はあるけれど、今のこの一瞬一瞬が、本当にいい将来を作り出していくのだという前向き、未来への縁起があまりありません。けれど、過去に対してそれだけのご恩があるのならば、その分、私たち一人ひとりには、よりよい未来を作り出していく責務があるのです。

かけがえない人間というのは、自分自身がかけがえない人だということを発見するとともに、かけがえのなさが奪われている人を見たら何とかしてあげたいと考えて、何かを実行する人です。たとえ何もできなくても、例えば宮沢賢治の「雨にも負けず」のように、そこで一緒にいて、おろおろすることはできない。何もできなくても、日照りがあれば一緒に何とかならないかと思ひ、病があればそこで一緒におろおろしているだけでも、それは本当に豊かな心であり、慈悲ということになるのです。

今の日本社会で、こういった慈悲とか利他ということを言ったり、「あの人喜んでから、私もうれしいな」とか、「何か困った人がいたら、私は助けたいな」ということを言うと、何かきれいごとのように聞こえるでしょう。だけど、それがきれいごとにししか聞こえない社会は、本当

は貧しい社会です。そのことを、人類の歴史は私たちに教えているのではないか。そのことを、お釈迦様も教えてくれたし、実はキリスト教も同じことを言っている。そして、同じことをダライ・ラマも教えてくれているわけです。

そのように、私たちが本当に困っている他の人を助けた時、あるいは、そのことに本気で立ち向かっていった時、私たち自身がかけがえのなさを取り戻していくことができるとです。その知恵を忘れてはいけません。「私だけが勝ち組になるう」とか、「六本木ヒルズの上に住むのが勝ち組なのだ」という教育をしたり、私たち一人ひとりがそのように思ってしまったら、必ずこの国は滅びると思えます。皆さんも、ぜひこの広くて恵まれたキャンパスの中で、この大きな地球社会全体を考えて、これから生きていってほしいと思います。

今日はかけがえのなさを取り戻せということについてお話をさせていただきました。どうもありがとうございます。

（本稿は講演会でのお話を編集部にてまとめ、上田先生に御確認をしていただいたものです。）